

【中学校】

I はじめに

中学校における校内研修は、学校や生徒の実態に即した主題を設定して、具体的、実践的に行われている。しかし、教科担任制のため指導分野が限定されがちであり、小学校と比べて全教師が共通に取り組む課題の範囲が狭いという問題点がある。そのため、道徳や特別活動、生徒指導、進路指導など、全教師が共通に取り組める研修主題が多くなりがちである。だからこそ、特に教科担任制の壁を克服し、新しい教育課程の方向性、評価観などを踏まえた校内研修を推進することが、個人として、集団としての力量を高めることにつながることを認識しておく必要がある。

以下に事例として紹介する京都市立衣笠中学校は、平成15年度から、文部科学省・京都市教育委員会の「国語力向上モデル事業」推進校の指定を受けて研究を進めている。衣笠中では、「国語力」を国語科のみならず、他の教科、領域、「総合的な学習の時間」及びいわゆる「学校裁量の時間」での指導など全教育課程を通して育成するものととらえており、学校教育全体で研究に取り組んでいる。その取組は、いわゆる指導と評価の一体化の関係を見直し、授業の工夫・改善を目指して、個に応じた指導の充実を進めた実践研究であるため、本県の取組にも大いに参考になると考える。

II 京都市立衣笠中学校の事例

1 学校の概要

京都市立衣笠中学校は、京都府の西北に位置し、北は衣笠山に接し、近隣には金閣寺、西に仁和寺等があり樹木に囲まれた静かな落ち着いた環境にある。校区は広く、金閣、衣笠、柏野、中川、翔鸞の5学区で構成されており、様々な職業をもつ保護者が居住しているが、京都の伝統産業の一つである西陣織に携わる家庭が多い。また、床柱として利用される銘木北山杉の生産に従事する家庭もある。教育に対する関心は高く、学校教育の推進に協力的である。

2 研究の在り方とテーマの設定

(1) 研究の背景

「国語」は生徒たちにとって母語である。母語であるゆえに、生徒たちは国語によってものを考え、他者との伝え合い（コミュニケーション）を成立させ、多様な人間関係を築きながら社会生活を営んでいく。そして、「そのことばは、その社会の文化そのものだ」とも言われる。

21世紀を迎え、国際化・情報化の進展や価値観の多様化など、生徒たちを取り巻く生活環境は悪化している。この急速な変化は生徒たちのことば（国語）にどのような影響を与えているか。生徒たちを取り巻く言語環境への影響について、社会の急激な変化とのかかわりから考えてみる。

本校校区においても、少子高齢化の進展は確実に進んでいる。また、同時に都市化や国際化の進行も見られる。たとえば、伝統産業の後継者の問題、新たな宅地化や再開発の中における地域コミュニティの形成の問題、外国の観光客や留学生と接する機会の増加、膨大な情報に日々接する状況などが挙げられる。こうした生徒たちを取り巻く言語環境の変化により、人間関係の希薄化が生じている。人間関係の希薄化は、「相手や場に応じた言葉遣い」「あいさつ」「依頼・謝罪のことば」「お互いを認め合い励まし合う言葉」など、社会生活と人間関係形成に不可欠な話し言葉の運用力の問題として表面化しつつある。

(2) 国語力向上への取組の方向性

生徒たちの「ことば（国語）」は、その言語環境に大きく影響を受ける。そのため、生徒たちの国語力向上への取組は、マスコミ、地域社会や家庭、学校生活など、生徒たちを取り巻く全ての言語環境がその対象になる。この多くの取組対象の中で、学校教育の現場に立つ者として、「学校教育が果たすべき国語力向上への取組」を進めようと考えた。

実践研究を進めるに当たって、当初の「国語力向上」に対する認識は、「国語力」は国語科で育

てる力であり、他の教科などの教育課程全体とのかかわりからとらえる認識は少なかった。そこで、次の2点から「国語力」に対する認識の深化を図り、実践研究の方向性を確認し合った。

ア 文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」を、「構造的に」、「精細に」とらえる。

イ 学習指導要領及びその「解説」を熟読玩味する。

ア・イにより、以下の2点を実践研究の方向性とした。

- ①実践研究は、国語科をはじめとする各教科、領域、及び「総合的な学習の時間」など、学校教育全体で研究する。
- ②実践研究においては、学習指導要領の改訂（平成10年12月14日公示）の趣旨や意図、改善点を踏まえた授業の工夫改善として推進する。

なお、具体的な実践研究を進めるに当たっては、いわゆる指導と評価の一体化を進めるとともに、個に応じた指導の充実を図っていくことも、併せて確認し合った。

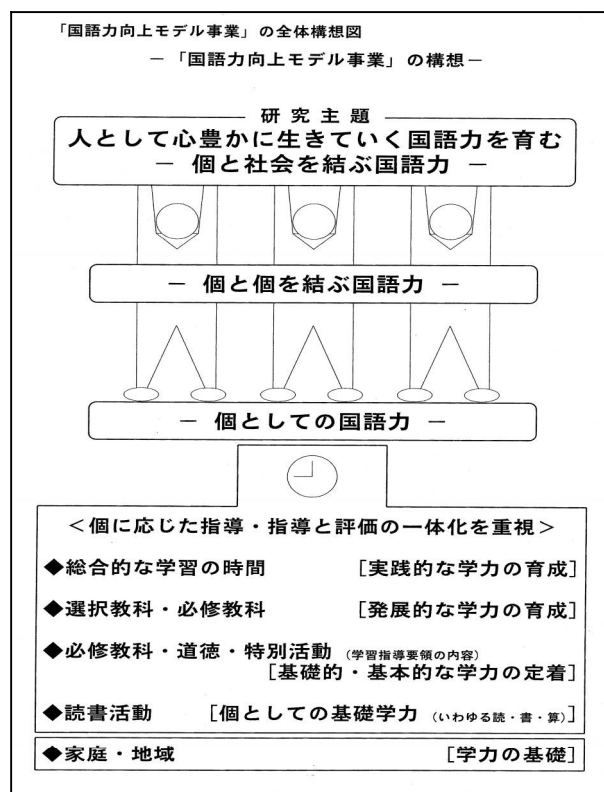
(3) 研究主題の設定

「ことば（国語）」は、生涯にわたり人の「自己形成」「人間関係形成」「社会形成」にかかわり、文化の基礎となり、生徒たちが成長する上で、不可欠な存在である。

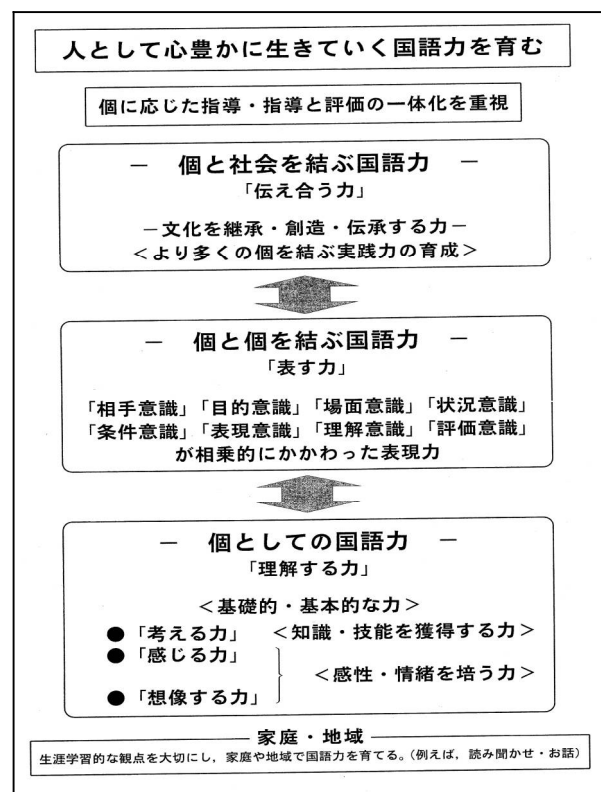
また、より豊かな社会を形成していくために、文化を理解・継承し、新しい文化を創造・発展させていくのも国語の力である。

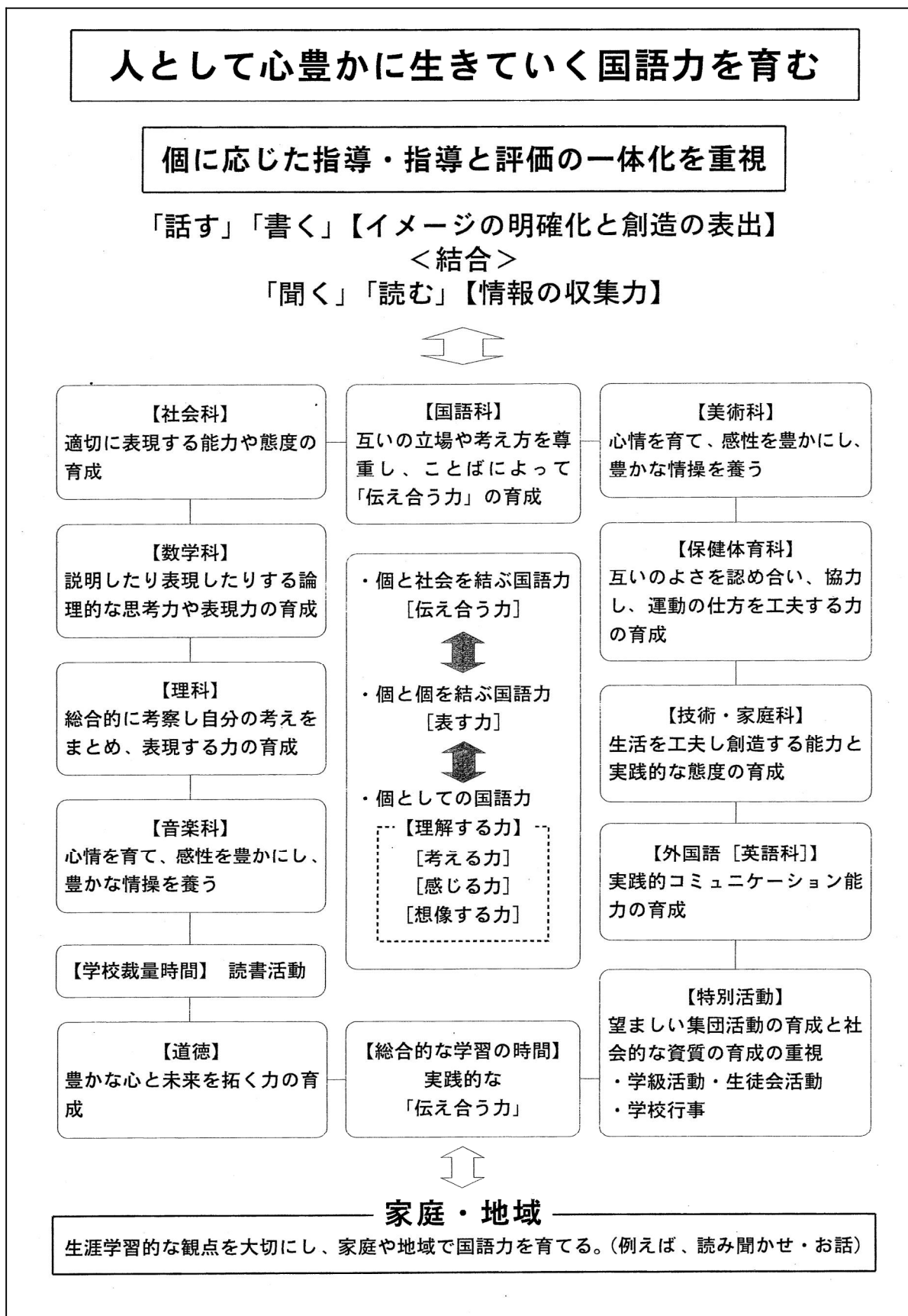
「国語力」は、生徒が“人として心豊かに生きていく”手立てとなるものである。そこで、研究主題を「人として心豊かに生きていく国語力を育む」と設定した。“心豊かに”に込めた思いは、生徒の「個」の確立と「社会性」の伸長への願いからである。そして、副主題として、15年度は、その伸長には欠かせない基礎・基本としての「個としての国語力」をもとに、「個と個を結ぶ国語力を育む」とし、16年度は＜より多くの個を結ぶ実践力＞としての「個と社会を結ぶ国語力を育む」とした。

<全体構造図1>



<全体構造図2>





(4) 具体的な研究の方向

実践研究を進めるに当たっては、次の六つの研究仮説を立て取り組んだ。

- ①国語科や他の教科で「伝え合う力」の基礎・基本の育成を図り、「伝え合う」活動を授業展開に取り入れれば、国語力の向上につながる。
- ②国語科及び他教科・領域と「総合的な学習の時間」の指導との関連を図れば、国語力の向上につながる。
- ③日常の言語活動の活性化と言語環境の整備を図れば、国語力の向上につながる。
- ④創意工夫を生かした特色ある取組を進めれば、国語力の向上につながる。
- ⑤目標・内容分析や生徒の学習状況の分析を[※]ルーブリックの手法を用いて行い、指導と評価の一体化の工夫・改善を図れば、国語力の向上につながる。
- ⑥学校教育全体で取り組み、それぞれの取組の相互環流を図る中で、各教科・領域等で培う国語に関する「知識や技能」を「生活」と結び付け、「思考力」「判断力」「表現力」などと関連付け、深化・統合化を図れば、生徒たちに生涯にわたって「生きて働く力」になる。

※ルーブリック(rubric)とは、評価尺度とその内容を記述する指標（具体的なサンプル）からなり立っていて、「評価指標」または「評価指針」と訳されている。「評価指標」は学習課題に対する子どもたちの認識活動の質的な転換点規準として段階的に設定される。

3 教育計画への位置付けと展開

(1) 教育課程の見直し

研究を推進するに当たり、最初に取り組んだのは、教育課程の見直しである。全教科、領域、「総合的な学習の時間」の年間指導計画・評価計画を見直し、目標・内容の分析、評価へのまとめ方、評価規準の作成・修正を行い、「迷ったときは、学習指導要領に戻る」を合い言葉とした。

「総合的な学習の時間」については、1時間を週時程に組み込み、後は適宜まとめ取りとした。また、長期休業中には教務主任を中心とした基礎研究（学習指導要領総則、中教審答申）となる学習会を開き、全員がその趣旨を確認した。

(2) 研究の経過

教育課程推進委員会は週2回、各学年1名の総合学習係会は週1回を校時の中に位置付け、発表会を中心とした研修計画を基に、計画の立案や確認、情報交換を行い、円滑な研究推進を図った。ここでは、16年度（最終年次）の4月から5月の研究の経過を紹介したい。

月 日 曜	内 容
4月7日(水) 総合学習係会	初会合衣笠中平成16年度総合学習の概要説明と今後の作業予定の確認 次回準備 ・各学年単元のたたき台作成 ・年間、一学期授業時数、係会と学年会の日程準備 ・各学年まとめ取りの時期、とり方の検討とすり合わせ
4月14日(水) 総合学習係会	・各学年単元案の提出の説明と検討・明日の学年会で提案・教科とのかかわりを各自が記入 ・来週木曜4限の係会で改訂版提案 ・来週の選択ガイダンスのタイムスケジュール検討を明日の運営委員会で検討 ・その次の週4/28(水)の総合でガイダンスを行う

月 日 曜	内 容
4月20日(火) 教育課程推進委	・全体構造図の作成の必要 ・教科、総合的な学習の時間、生徒会活動、読書とのかかわりの中での研究推進の進め方 ・生徒会の委員会等の活動を年間で調整し、「伝え合う力」との関連を考える
4月22日(木) 総合学習係会	・「きぬかけのみち」オリエンテーションプリント検討とオリエンテーション日程調整 ・1年生指導案の説明、フィールドワークの方法と題材集めについて
4月27日(火) 教育課程推進委	・「きぬかけのみち」オリエンテーションプリント検討 ・国語力向上研究推進委組織表の検討 ・次回までに研究と事務局の役割分担 ・冊子の内容について、研究構想図について考えていく
5月6日(木) 総合学習係会	・1・2年総合単元指導計画の検討、2年の総合オリの様子報告 ・教師の指導記録、生徒の記述、記録を残す ・生徒用記録用紙について1年 ・5月18・19日の1・2年フィールドワークについて、内容、事後の指導 ・夏期研修会の中で学年で総合の打ち合わせができる時間の設定をする
5月10日(月) 教科会	・予算の計画的な執行 ・年間指導計画、評価計画の作成（別紙プリント参照） ・指導要領の年間最低時間を超える教科の内容、単元の検討
5月11日(火) 教育課程推進委	・国語力向上研究推進委員会の組織表、メンバーの役割分担 ・冊子原稿の柱立てと分担の大枠 ・年間の研修計画について ・一次案内、二次案内の発送について
5月13日(木) 総合学習係会	・1年生各クラスイメージマップ作り、感想 ・2年生のオリ感想、社会、数学で相互環流がみられる ・3年生のオリ感想、ポートフォリオづくりと評価に生かす ・プリント（教師、生徒の感想）やプリントのDATAを残す ・総合用の図書購入の検討
5月21日(金) 臨時総合学習係会	・1年フィールドワークの事後報告 積極的に行動インタビュー 計画立案も好き 教師のサジェスション内容の検討必要 調査結果の報告会の時間がもっとほしかった ・2年フィールドワークの事後報告 調査場所を特定しすぎたきらいがある 回る時間が早かった ともかくいろいろな情報を集めてその上で課題を見つけさせる 課題発見までに時間

	の格差が出そう ・生徒の指導の方向性は教師が練る・生徒任せの課題の発見はない・常に目標、内容、つきたい力でチェック、吟味の必要 ・佐藤助教授の「学習指導要領の一部改正に伴う、総合的な学習の時間の一層充実」を参考に
5月25日(火) 教育課程推進委	・国語力向上一次案内の確認 ・一学期研修計画、夏期研修内容の検討（特に研究発表の原稿執筆と役割分担を急ぐ） ・NRTの分析と活用について、課外学習の取組について ・2年生チャレンジ体験について ・平成15年12月26日学習指導要領一部改正後の解説書の付加部分についての説明 ・中等教育資料の本校国語力向上の取組の原稿の紹介と6月30日の教育改革実践講座について
5月27日(木) 総合学習係会	・1年生「きぬがさ」からイメージを広げよう、文字でなく絵によって視覚からイメージを広げる練習・・建物、自然、道に意識がいつている ・2年生「上七軒」のグループなどは、興味を持ってどんどん追究している ただしまとめて、発表はない それが終点でない ・3年生は次回報告 ・「総合的な学習の時間」全体計画を参照しながらの各学年の報告の検討と今後の方向性についての意見交換

4 授業研究を中心にした校内研修の在り方

(1) 目標・内容の分析

各教科において「伝え合う力」の育成を意識した授業を行い効果をあげるためには、目標・内容分析を通して質的な評価規準と判断基準での「評価の研究」も行うことが重要であると考えます。つまり、「適切な」「効果的な」などという抽象的な概念を、生徒の実際の具体的な姿をもって判断基準にすることである。

そこで、学習指導要領の指導目標や指導内容を教科書を使用した教材の単元レベル・教材レベルで、より具体化・構造化・精選化を行った。

(2) 年間評価計画・学期ごとの評価計画の作成

評価規準や判断基準を年間評価計画や学期ごとの評価計画としてまとめ、生徒・保護者にも配付した。これは、評価の質的な変容を段階的・多面的に生徒の姿を以て示せば、授業の工夫・改善と妥当性の高い評価規準と判断基準づくりの手がかりとなるものであり、生徒たちにとっては、主体的な学習活動を進めていこうとするときの「学習のめやす」となると考えたからである。

毎日の授業実践のなかで、子どもをどうとらえ変えていけばいいのか、子どもを変えていく具体的な手立ては何か、ということを追求している。

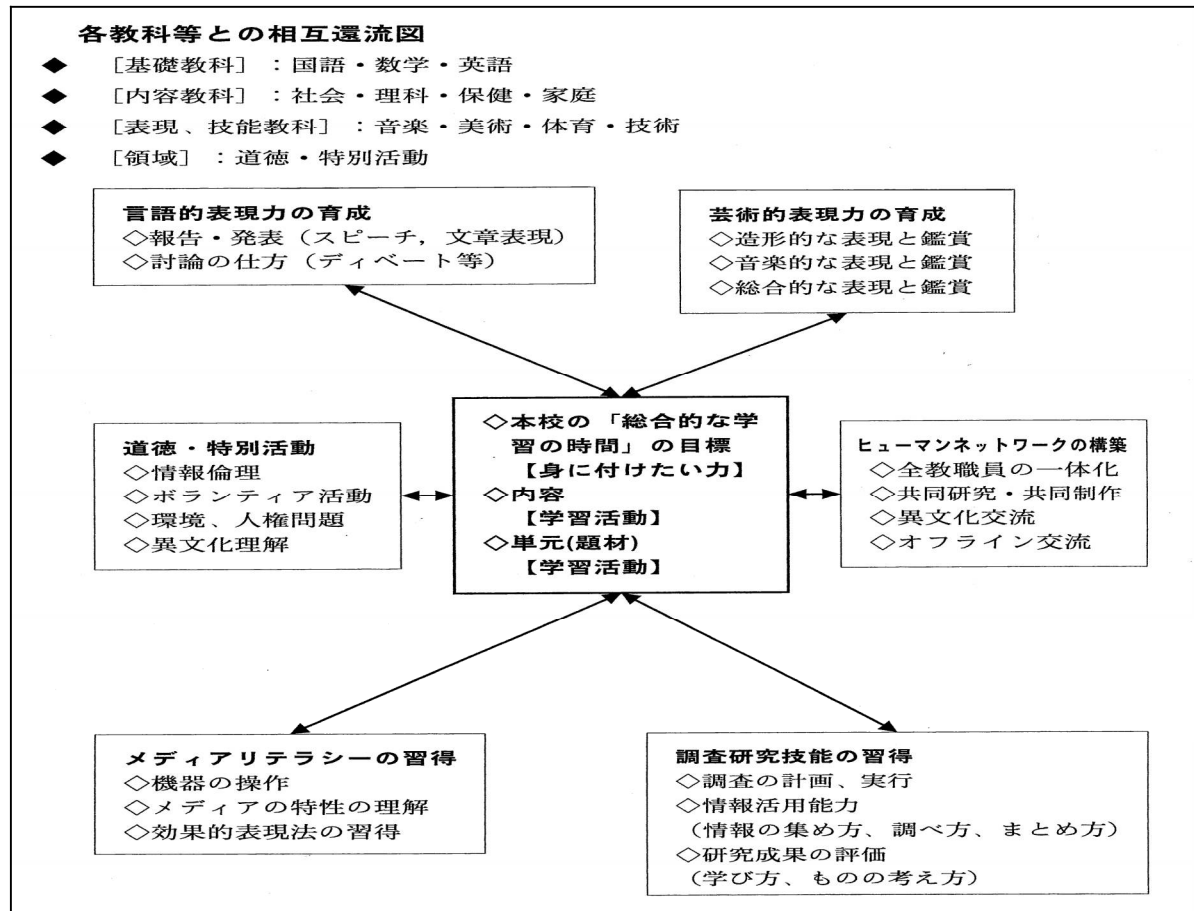
公開授業に向けての取組では、外部から助言者を招き、検討をかさねている。

(3) 「総合的な学習の時間」のカリキュラムの見直し

①学校全体として生徒にどのような力を付けるのかを明確にし、共通理解する。

②学年単位ごとにテーマを決め、単元をつくる。

＊総合学習係会で、ベースを吟味・検討し、詳細な学習指導案は、各学年会で検討する。
 生徒たちは、変化の激しい社会の荒波を泳ぎ切るために知の総合化・知の実践化を図りながら経験を積み重ねていく必要がある。しかし、生徒たちの日常の中では、なかなかこのような学習場面がない。そこで、経験の少ない生徒に、教科等で獲得した「知識」や「技能」と「思考力」・「判断力」・「表現力」などとの相互の関連付けを行い、学校が地域や家庭の力を結集して、意図的、計画的に学習場面を設定し、実践的な「伝え合う力」を養う場面が「総合的な学習の時間」だと考えている。以下は「総合的な学習の時間」と教科・領域などの相互環流図である。



（４）読書指導の試み

①取組の方向性

ア読書習慣をつけるための「朝読書」

「みんなで読む」「毎日読む」「好きな本を読む」「ただ読むだけ」の４原則

イ読書指導としての「読書の時間」（「学校裁量の時間」木曜６限の活用）

意図的・計画的な読書の指導

ウ図書委員会の活動としての図書環境整備・読書奨励・図書室開館運営等の取組

②取組の体制

ア企画・立案は、読書指導小委員会（図書館教育・各学年の図書委員会指導・研究主任・教務主任）が行う。

イ学年ごとの「指導目標」「指導内容」「選定図書」等については、図書委員会指導担当者が教務部の時間数提案を受け、学年ごとの学期計画を提案する。

ウ生徒への指導場面での指導体制については、学年で検討して実施する。

5 研究の成果と課題

(1) 教師の変容について

- ①学習指導要領やその解説を玩味熟読し、「確かな学力」を育む授業について確認できたこと。
- ②「伝え合う活動」を授業に取り入れることで、授業が「変わってきたこと」、あるいは「変えようとしたこと」。
- ③生徒たちの学習活動をどのように評価すればいいのかという課題をもつことにより、「伝え合う活動」には、各教科独自の観点が存在するのを認識できたこと。
- ④年間評価計画や単元・題材の分析を通して、「学期ごとの指導計画・評価計画（評価規準を含む）」を作ろうとしたこと。

(2) 生徒の変容について

- ①「伝え合う活動」を授業に取り入れることで、生徒が能動的に取り組むようになった。
- ②生徒と教師が、「会話を楽しむ」状態が生まれつつあること。
- ③生徒たちの中に「ことば」や「伝え合う」ということの重要性についての意識が芽生えつつあること。

＊上記の成果は、1年半の取組であるため、生徒の変容として明確な成果をもち得てはいないが、「手応え」という主観に基づく成果である。

(3) 今後の課題について

- ①「年間評価計画」、「学期ごとの指導計画・評価計画（評価規準を含む）」をより実用的なものに修正していく。
- ②生徒たちに芽生え始めた意識を日常化するために、生徒会活動や学級活動、日常生活と関連して実施する道徳、実践的な力を培う場としての「総合的な学習の時間」での取組の必要性。
- ③「質的な学力の評価」については、その変容を段階的・多面的に生徒の姿や状態で見取ろうとする方法の研究を始めたばかりであり、現在は、数多くの生徒の姿・状態の事例を蓄積する段階である。

6 おわりに

学校長の研究経過のご説明によると、「国語力向上の推進校となったことを契機とし、日々の教育活動のマネリズム化を防ぎ、学校の活性化を図るとともに、研究の過程で、実践と堅く結びついた知識や技能を修得し、教員としての資質を高める。」「研究発表会を起爆剤として研究を推進する。」「まず、研究方法を明確に示し、各教員の実践に結びつけることにより、教員の研究意欲が高まる。」等、自らが牽引役となり、短期間で研究を振り返り、よりよい方向に修正していくことを繰り返すことで、研究を深めていったことなどが語られた。「国語力向上モデル事業」研究報告の成果と指導の試みの最後に、「今、『国語力向上』に向けて、誰かが始めなくてはならなかった。それが都道府県を単位とするモデル地域であり、推進校であったのだろう。わたしたちは、今、実践研究という新しい歩みを始めた。しかし、これはこの2年の歩みで終結させてはならない。この歩みが他の中学校や校下小学校、家庭や地域社会に広がり、そして、世代を超えて取り組まれていくとき、初めて『文化』として定着し、生徒たちに変容をもたらせるのだろう。」という文でしめくくられている。

変化し、多様化する社会に生きる子どもたちに、教師集団が一体となって共通する課題に取り組むとき、子ども・教師双方に直接・間接に与える影響ははかりしれない。教師は常に自己を磨き、自己変革をめざす努力を続けていくことが求められている。

校内研究は、教職員研修の基盤であり、教師の自己研修と自己変革の最適の機会として、今後ますます重視されるであろうことは疑う余地がない。衣笠中学校の取組が、今後、校内研究の改善・充実を図る取組の一助となることを願っている。